

第二部

1

墓地の前の家は大きくなってから夢に出てくることもあつたろう。しかし何度も繰り返し思い返すなら、想起と夢との区別はつきにくくなる。ここが幼年時代の樂園だったのだろうか。光雄にはそれほど好んで思い出したような気はしない。ただ特定の光景が限定された視点から再生される。この視点はカメラのように三六〇度回転させることも、周回させることもできそうだ。さらには庭付きの家全体を、上から俯瞰することも可能だ。墓地の側からばかりでなく、牛市広場の空中から見やることもできるだろう。玄関の引き戸を開けて、光雄はまた中に入っていく。ガラガラと音のする、細い格子にガラスの入った引き戸だ。玄関と座敷との間に間仕

切りはなく、右側の六畳が三和土からすぐ見えている。いやこれは四畳半だったのだろうか。子供の体は大人の半分もなく、寸法の身体比に対応して視点もぐっと低い位置にあるので、大人にとってはマツチ箱のような家でも十分大きく見えている。北向きに窓がある。この窓際に立つと、遠く東北方向に吉野川の竹藪が見えた。

南側の部屋は日当たりが良かった。段々畑の上の段との高低差が比較的小さいので、座敷に姿勢を正して座るなら、石垣の上の土地が大人の目には見えていただろう。この石垣のすぐ下は天然の細長い水路になっていて、これと家との間に人がやっと通れるくらいの通路を確保していた。記憶にあるのはこの通路の土が、水際なのに、黄土色にいつも乾燥していたことである。その理由を光雄は母に尋ねたことがある。家を建てる前に、水が床下に染み込まないよう、南側にコンクリートを打たせたのだそうだ。この家は結婚の条件だったらしい。皆吉に越してきてなお日の浅い父の家には、持ち家というのがなかった。それが農家である母の実家からすると、何とも理解できない。界限では一番の多額納税者だという評判ではないか。この要求を容れて、祖父母は息子の結婚の前に土地を探し、直ちに家を建てたというのではないようだ。しかし子供が産まれることになって、この要求がどうやら再浮上したらしい。だからこの墓地の前の家は、誰よりも光雄のために建てられたものなのである。そのプランに、母も少しは関

与したのであろうか。

家の南面に天然の細い水路があり、その先は石垣であるから、これは縦方向にしつらえた庭の代替物と見なすこともできる。苔や水気を好む植物が生えていて、天候や季節に応じた様相の変化もある。積んだ石の間からはトカゲが姿を見せ、見事な鱗のある蛇が、岩の隙間から隙間へとその胴体をゆっくりと滑らせてゆく。水路の水は澄んでおり、そこには赤腹やヒキガエルが泳いでいた。だからこの家に住んでいた間は、蛇は少しも怖くなかった。ところが小学校に入ってから、裏庭の浅い泉水の水面を滑るように泳いでいる蛇を見て、光雄は蛇が怖くなっているのに気づいた。渡り廊下から見える円形の水盤のような池であるが、これは二年生の時の教室に接してあった。短期間にどうしてそんな変化が生じたのだろうか。

この時の担任も女の先生であるが、この先生から「吉田くん、あがったりすることはないで？」と訊かれることがあった。その時には「あがる」という言葉の意味を知らなかった。光雄は全校生の前で何かをする役目を与えられていたのだろう。時をおかず、この先生自身が朝礼で校庭の壇上に立った。先生はその時、人前で「あがる」ということを、表情や身振りで表しているように見えた。新米の先生にとっては、「怖気付く」機会は、日常の校務の中になお頻繁にあったのである。光雄も小学校の高学年になると、「あがる」ようになっていた。しか

しこの変化に気づいても、愉快なことではないから、それが成長だとは感じなかった。社会経験を通じて、あるいは模倣によって、人は無邪気な頃にはなかった不必要な嫌悪や恐怖にとられるようになる。一旦それにとられ、反応が身体化されると、もはやそれを容易に振り払うことはできない。それは偏見や先入観も同じことだ。ところで担任の先生も「吉田くん」と呼びかけているのだから、既出のものを再確認して、この年代記の語りを担う中心人物は、吉田光雄ということになるのだろう。それならそれでいい。

石垣下の細い水路の水は、右手の方で濾過する仕掛けを介して大きな地下タンクへと繋がっていた。このタンクには木の蓋が上に乗って全体の半分ほどを隠しており、口の開いた半分は長い杓子を入れて水を汲み、煮炊きや洗濯に使っていた。上の段々畑に家はなく、左側の小丘に墓地はあっても、右の山の斜面にまだほとんど人は住んでいなかったから、飲料水が汚される心配は少なかった。湧き水ばかりでなく雨水もたっぷり加わっていただろうが、古くから山林でくらす人々の「笥の水」に近いものである。「水源地」が存在したのだから、町営水道はすでにあつたはずであるが、少し街路を外れると、水はなお自給する必要があつた。平地には井戸もあちこちにあつた。共同の井戸水を手押しポンプで利用した高木の借家に、水道があつたような気はしない。進藤は土地が隣接しているから、「上の家」を取得すると、自分の家か